

小児看護学実習での家族との関わりで困難感を抱いた学生に関する質的研究

笠原玲菜、坪川麻樹子、松井由美子
新潟医療福祉大学 看護学科

【背景・目的】小児看護学領域では患児との関わりはもちろん、その家族との関係性が非常に重要となってくる。そのため、実習を行う学生は1週間という短い期間の中で、患児そしてその家族と関係性を築く必要がある。小児看護学実習において、子どもと関わることの少ない学生は、患児や家族との関係形成を深めていくうえで困難を生じている。本研究では小児看護学実習において対象の患児の家族との関わりの中で困難感を抱いた場面での学生の思いについて明らかにし、対応について考察した。

【方法】小児看護学実習を終了した4年生に対し研究参加の募集を募り、4名の応募があった。その対象者関係形成が困難であると感じたときの行動などについて半構造的面接法にて30分～1時間程度自由に話してもらった。

得られたデータを、困難感を抱いた場面、それに対する行動の内容に焦点をあてて一文章一意味でセンテンスをコード化し、サブカテゴリー・カテゴリーと分類をした。データの分析過程においては信頼性と妥当性を高めるために、研究協力者を交えて繰り返し協議し検討を重ねた。なお、本研究は新潟医療福祉大学倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号:18037-180710)。

【結果】対象者は4名であり、性別は女性が4名であった。受持ち児の年齢は最年少が6ヵ月、最年長が6歳であった。対象者が主に関わった家族は全員が母親であった。

小児看護学実習において看護学生が受持ち児の家族と関わるうえで困難感を抱いた場面での思いについて分析した結果、11のサブカテゴリーと3つのカテゴリーが抽出された(表1)。また、困難感を抱いた場面に対して学生がとった行動について分析した結果、21のサブカテゴリーと5つのカテゴリーが抽出された(表2)。

【考察】小児看護学実習で患児の家族との関わりにおける学生の思いは、知識不足に関連した困難感がみられた。学生は小児看護に関する知識と看護技術の不足や不安を抱きつつ実習に挑んでいることも多いことが先行研究で明らかになっており(阿部:2011)、本研究の結果と同様に、知識がないことで様々な不安が生まれ、家族と関わるうえで困難があった。小児看護学実習では病棟での実習期間が1週間と短いため、実習前から疾患や検査に関する知識を早期に習得することで困難感が軽減することに繋がること示唆された。

【結論】学生は家族との関わりについて、疾患等の知識不足が困難感を招いていた。学生は疾患等の知識を増やす努力をし、困難感を軽減しようとしていた。

表1: 看護学生が受持ち児の家族と関わるうえで抱いた困難感

カテゴリー	サブカテゴリー
知識不足による関わりでの不安	疾患や検査に関する知識不足 自分が正確に理解していないことを親から質問されるかもしれないという不安 患児・家族へ伝わるかもしれない自分の不安 理解しているつもりでも不安になる発達段階に関する知識 知識が豊富な母親に対する関わりにおける戸惑い
母親に負担をかけたくない思い	自分自身の実習への緊張感からくる困惑 傷つけるかもしれない不意な言葉 「母親」と関わる経験が少ないことから感じる困惑 母親と関わる前から感じる不安 疲労がみられる母親への関わりへの戸惑い
信頼関係を築く上での気遣いと不安	自分の関わり方への不安 邪魔にならないようにという気遣い

表2: 困難感を抱いた場面に対して学生がとった行動

カテゴリー	サブカテゴリー
家族から信頼を得るための行動	笑顔で不安な表情をしない 自分の中で考えてから言葉を発する ねぎらう言葉をかける 自分から話しかける 看護師へのつなぎ役になる 家族の質問に対して情報提供を行う 家族の性格を考えたうえで関わる 家族不在時の患児の様子を伝える 家族の悩みや愚痴を傾聴する 親子の時間を大切にする 休息の時間を作る 処置や検査の内容の説明を行う 礼儀正しく関わる
誰かに相談をする	教員から助言をもらう 教員・看護師に相談する 学生同士で相談する
知識の習得	疾患・検査に関する知識を増やす 些細な疑問でも調べる
子どもを介して関わる	子どもとの遊びを通じて家族と打ち解ける 子どもに触れながら家族と関わる
短い時間の中で工夫する	情報収集の際に質問の方法を工夫する